

現代の国際貿易

早稲田大学教授

町田 実著

中央経済社

著者略歴

町 田 実(まちだ みのる) 浦和市出身

1939年 早稲田大学専門部商科卒。

1946年 早稲田大学人文科学研究所勤務を経て

1963年 ヨーロッパに留学。ソ連、東欧諸国を視察。

現 在 早稲田大学商学部教授。商学博士。

国際経済学会理事。日本貿易学会前会長。

専 攻 国際貿易論、国際経済学。

著 書 社会経済学の基礎理論(前野書店)、国際貿易論(同上)、
国際貿易の史的構造(同上)、世界市場論序説(多摩書店)

訳 書 ルフラン「商業の歴史」(クセジュ文庫)、ジャーヴィス
「現代企業の発展」(早大出版部)

現代の国際貿易

昭和54年11月10日 第1版発行

著 者 町 田 実

発行者 渡 辺 正 一

印刷所 (株)清水印刷所

* * *

発行所 株式会社 中 央 経 済 社

〒101 東京都千代田区神田神保町1-31-2

電話・編集部(293) 3 3 7 1(代)

営業部(293) 3 3 8 1(代)

振替口座・東京 0-8432

落丁・乱丁本はお取替え致します。

関川製本

3065-640528-4621

は し が き

1970年代の世界経済は、石油ショックを契機にいわゆるスタグフレーションの症状を呈し、先進諸国のみならず全世界を混迷におとしいれた。爾来、先進諸国間の貿易が伸び悩み、為替相場が乱高下し、国際収支の不均衡が恒常化し、赤字国、黒字国の貿易摩擦が表面化し、保護貿易の動きがちらほらするといった異常な状況が続いている。しかし、こうした状況を前にして、世界の諸国は調整に努力してきた甲斐あって、6年間にわたり論議を重ねてきた東京ラウンドがようやく決着にこぎつけたことは一応評価さるべきであろう。

この間アメリカをはじめとする先進国の巨大企業は多国籍化をおし進め、生産の国際化とその取扱いは急激な伸びを示したので、多くの人びとの強い関心を引きおこした。多国籍企業はその活動の多様化と世界の資源活用能力によって、世界の福祉を最大限に増進する手段とみなされる反面、それが最近開発途上諸国との関連を強めるにいたって、帝国主義の危険な手先とする非難の声があがっている。

ブレトン・ウッズ体制の崩壊にともない新国際経済秩序を要望する声もまた開発途上諸国の多国籍企業活動への規制問題と並行して次第に大きくなってきている。このような情勢に際し、国際貿易の問題は、ますます重要性を強めているとはいえ、これを従来の問題意識と研究の枠組の中で取り上げるということには、何か戸惑いを感じざるをえないものがある。

貿易の問題が、単に商品貿易に限らず、見えざる貿易の諸項目とも関連することはもとよりだが、今や多国籍企業の諸活動（投資、生産、販売、……）の全分野に大きくかかわっていることを知らなければならない。したがって、資本と労働の移動の困難性を前提とした古典派貿易理論のごときは、現実的には知的遊戯としての興味以上のものではなくなったとする見方もなくはない。われわ

2 は し が き

れの論議は単なる感情論であったり、知的遊戯であってはならない。より現実をふまえた真実の探求が今ほど要望されている時はないであろう。

以上のような問題意識をもって本書を執筆することにより、少しでも自分なりに納得のいくものができればというのが私の最初からのいつわらざる願いであった。しかし、紙数の関係もあり、また私の力不足から多国籍企業の規制や新国際経済秩序の問題に詳しくふれられなかったことは残念であるが、別の機会にゆずりたいと思う。また行間思わざる瑕疵のあるやも知れず、果して所期の目的が達せられたかどうか大方のご批判を待たねばならない。

最後に私事にわたって恐縮だが執筆の途中私は胆石の手術を行い、ついで妻も病魔におかされるなどのため、大きく予定をくずしてしまったにもかかわらず、このような形で本書が上梓できたことは、早稲田大学商学部の同僚諸兄のご激励と中央経済社の山本常務および編集の守屋氏の温かい友情と辛抱強いはげましのお蔭と考え、ここに心からの感謝の意を表したい。

1979年9月3日

町 田 実

目 次

第1編 国際貿易の概念と問題の視点

序 章 国際貿易の概念を繞って.....	1
1節 国際貿易概念の形成過程	2
2節 資本主義と外国貿易	5
3節 貿易の概念規定.....	9
4節 国際交換の転形過程	13
5節 資本主義の展開と貿易形態	16
第1章 国際貿易の成立と発展のための諸条件.....	24
1節 労働生産性の国際的不均等化	25
2節 運輸交通機関の発達	27
3節 国際的貨幣・信用機構の整備	31
第2章 国際貿易の発展を阻害するもの	34
1節 文化地理的制約.....	34
2節 政治経済上の制約.....	35
3節 自然的障害と人為的制約	36

第2編 現代国際貿易の展開とその論理

第1章 資本主義的生産と国際貿易	39
1節 産業革命とイギリスの世界市場.....	40
2節 古典派貿易理論の基礎構造	43

2 目 次

3 節	自由貿易主義に対立するもの	50
4 節	パックス・ブリタニカの下における世界貿易の組織化	54
第2章	イギリスの世界市場の変容過程と国際貿易	59
1 節	資本主義的生産の不均等発展と貿易	59
2 節	独占資本の形成後における世界市場の変質	63
3 節	大戦後の世界市場関係と貿易	67
4 節	世界経済恐慌と国際貿易	72
5 節	伝統的国際貿易理論の対応と混迷	76
第3章	パックス・アメリカーナと世界貿易の推進	82
1 節	パックス・アメリカーナの成立	82
2 節	アメリカによる世界貿易の再建と推進	85
3 節	戦後資本主義世界貿易の構造変動	92
4 節	戦後アメリカの国家と資本	95
第4章	世界経済の多極化現象と国際貿易	100
1 節	ブレトン・ウッズ体制の崩壊	100
2 節	世界経済の混迷と貿易	102
1	世界経済の混迷	102
2	世界貿易の動向	106
3 節	多極化する南北問題と貿易	110
4 節	東西貿易の進展と変貌	114
1	東西貿易の進展	114
2	変貌する東西貿易	118

第3編 現代貿易政策とその背景

第1章 現代資本主義における貿易政策	125
1節 現代資本主義と貿易政策	125
2節 貿易政策の主体と対象	129
3節 貿易政策と国家の対外的役割	132
1 通商条約の意義	132
2 通商条約の諸形態	133
3 最恵主義と互惠主義	134
4 多国間協定および地域的経済協定	137
5 国際商品協定と世界貿易会議	143
第2章 貿易政策の技術と問題点	148
1節 輸 入 制 限	148
2節 輸出奨励と輸出規制	153
1 輸出奨励政策	154
2 輸出規制問題	157
3節 関税および関税政策	159
1 関税の目的と機能	159
2 関 税 政 策	161
第3章 国際収支均衡政策	165
1節 国際収支問題の登場とその意義	165
2節 国際収支の構造	172
3節 国際収支の調整策	176

第4編 多国籍企業の登場と国際貿易の再編

第1章 基礎的諸問題	183
1節 多国籍企業の成立と発展	183
2節 多国籍企業とは何か	189
3節 多国籍企業と現代国家	193
第2章 多国籍企業問題の発生	196
1節 1960年代後半以降のアメリカ経済と多国籍企業	196
2節 多国籍企業問題	200
第3章 多国籍企業と国際貿易	208
1節 生産の国際化と国際貿易の再編	208
2節 多国籍企業による企業内分業	212
3節 多国籍企業の発展と世界貿易の前途	216
第4章 多国籍企業の構造と活動	221
1節 多国籍企業の構造	221
2節 多国籍企業の活動	229
3節 外国籍企業の世界戦略	232
第5章 多国籍企業の世界戦略の展開と これに対応する諸問題	236
1節 世界的経営戦略の展開	236
1 国際マーケティング戦略	236
2 生産と供給システムの確立	243
2節 世界的経営戦略のもたらす諸影響	245
3節 低開発諸国の対応	250

第1編 国際貿易の概念と問題の視点

序章 国際貿易の概念を繞って

現代社会における国際貿易の問題は、きわめて身近な現象であると同時に、それは複雑にして巨大な影響力をもつシステムにかかわる問題となっている。国際貿易の実体を解明するということは、そこに存在している現象面の研究だけでは片手落ちの感を免かれない。その背景にある構造を明らかにすると同時にこれに関連するシステムとその機能を解明することが必要であろう。それはまた歴史的に生起した問題であるだけに、その発生の根源に溯ってみることも重要となる。

そのために、われわれは、複雑な貿易現象の分析に先立って、国際貿易の概念そのものについてその起源に溯って検討することから始めたいと思う。なぜなら、そこには最も単純な形態での貿易現象が存在したであろうし、現代のそれは、その発展の結果であろうからである。

しかしながら、貿易現象を過去に溯るといっても、考古学や歴史学に見るような証拠になる資料や文献を探索して、これを解明するというのではない。もちろん、証拠になるものがあれば、当然利用されることになるであろうが、それが存在しなくとも、現在到達した隣接科学の結果と方法をもって迫ることは可能であろう。

社会的諸事象も、生物学と同様、古い時代に存在した諸問題とその痕跡が、

2 第1編 国際貿易の概念と問題の視点

もっとも新しい時代の問題の中に根強く残存し、突如現象として発現することがありうる。もちろん、日々生起する問題が、つねに過去の再現とはいえない。まったく新しい問題であるかも知れない。しかし、だからといって、古い時代のそれと全く無関係であるということにはならないであろう。鶏から鶴は生れないからである。

1 節 国際貿易概念の形成過程

現代の国際貿易は、その複雑さと規模の壮大さにおいて物々交換の時代と比較しうる何ものもないように見える。しかし、今も昔も貿易は「物と物との交換」を通して行われる国際的なコミュニケーションであり、良かれ悪しかれ、これによって、人類の交流が深められ、社会の知的物的発達が見られたのである。国際貿易は物々交換としてかつて原始社会では呪術が支えとなり、今日では貨幣と信用のシステムがこれを支えている。

古代社会学や文化人類学の成果の教えるところによれば、人類は原始社会の状態においても集団と集団との間で交換が行われた。もちろん集団の内部では交換関係は存在せず、そこでは必需物資はその成員の間に分与されていた。交換は集団と集団との間の宗教的儀礼的な要素の入り交ったものであり、心理的にはかなり複雑な意識と衝動からなっていた。それはマルセル・モースのいうように未開社会におけるポトラッチに類するものであり⁴⁾、交換を約束するのは、個人ではなく道徳的人格としての氏族、部族、家族であったが、交換は贈り物に対する反対給付という形をとったのである。もちろん、それは長い経験によって、正確な計算ではないが、公正でなければならなかった。しかし、こうした交換の多くは無言貿易 (mute trade or silent barter) であって、偶然的で気まぐれのこととはされられず、時に目算の違いから公私の紛争となることもしばしばであった。ここでは、交換の出発点が贈与か掠奪かは論争のあるところだが、実際には、掠奪になることもあったであろうし、時に贈与が先行したこともあったに違いない。このことは商業の時代になっても同じこと

である。その根底にある心理は共同体における生活充足の意識ともいうべきものであった。いいかえれば、それは使用価値の獲得を目的とした交換だったのである。

商人が出現し恒常的な交換の場があらわれるためには、農業生産の発展と冶金革命による新しい金属の労働用具が開発される時代を迎えねばならなかった。その上重要なことは交換手段としての貨幣の出現を見なければならない。発展した農業の分野に剰余があらわれ、余暇を手に入れると、一方では、専門化した手工業者が出現するとともに、他方、交換は恒常化し、これを専業とする商人が登場する。

「銅や錫を獲得するために、食糧の剰余や技術や余暇を十分にもった農民たちは、それらの鉱物をさしあたっては略奪によってでも、ついで正常な交換を通じて、みつけることのできる場所を求めてでかけていかなければならなかった。遠くへだたったところでの交換、何百軒もはなれた地域間の国際的交換は、もはや、家内的手工業や農業の片手間に行う補助的活動というわけにはいかなかった。新たな分業が作りだされたのである。交換の実行は、他の経済活動から分離した。すなわち、貿易が誕生したのである。」^[2]

このように国際貿易または異なる政治単位集団の間の貿易は、商品交換のもっとも古い形式であり、青銅器時代にはすでに地球上広大な地域にわたって大規模な形で展開された。紀元前6世紀には、オリエントは陸上商業で栄え、バビロニアは世界の貨物集散地となり、カスピ海沿岸、黒海、インドからやって来た隊商のもち込んだ産物やエジプト、地中海からの産物が交換されていた。海上貿易はもっと古く、東地中海方面は紀元前3000年頃からクレタ人、ついでフェニキア人が盛んに活躍をはじめ、紀元前3世紀から約6世紀間は地中海貿易の黄金時代であったことが知られている^[3]。

しかし、このようにみえてくと古代社会の貿易活動が平和的で安定的であったかのように思われるであろうが、大体において貿易組織は軍事的であり戦闘的であったことが多く、平和に見えたのは、強力な軍事国家が背後にあった時だけである。そこでは遠隔地との貿易は国家の代理人としての商人によって行

われていたのであって、彼らは決して単なる商人ではなく、武力をも行使する集団であったのである。

やがて、各地域の生産の拡大と人口の増大は、私的所有の拡大と法的規制の必要を強め国家組織の強大化をたどる一方、個人主義的合理主義の発達を促してゆく。貿易活動の恒常化と商品種類の増大の中で、貨幣と信用の役割がますます大きくなる。古い贈与や掠奪の制度とは別個に、つぎつぎと新たな法体系と機構が整備されていく。商業主義が合理主義の衣で包まれて合法化され、贈与や掠奪の制度は、表面的には影を薄くしていくのであるが実質的には利益追求のための商取引の中に包括されてしまう。

要するにそれは商業的剰余価値獲得のための活動であるが、近世の初期においては重商主義として体系化され、商人活動は国家の活動と一体となって強力に推進された。しかしそのすべてが円滑に行われたわけではない。そこではかなり直接的な利益追求（金、銀、貨幣の獲得）が特徴とされていたが、やがて公益と利益との矛盾が露呈されてゆく。

重商主義時代にあつては、国家は貨幣経済に最大の関心を払い、国内経済の総合的発展に意を尽すところが少なかったけれども、貿易活動の展開は自ずから生産活動に刺激をあたえ、地方的市場の発展からやがて資本主義国家を登場させるに及んで、個別取引における個人の役割に合法性を与える基盤が熟成する。同時に剰余価値獲得の方法も一見間接的合法的な様相を示すこととなった。とはいえ反面もっとも古い贈与や掠奪の制度がその背後に隠蔽された形で併存していることも事実である。それがときに国際社会においてナショナリズムやナショナル・インタレストの問題と関連して登場するという事態も発生して混乱を招くこととなる。そこに国際取引における合理性と非合理性をみることができよう。それは現に、企業の多国籍化が進展し、大々的に世界戦略を展開するにいたって、企業の買収なり、国家主権の懐柔などを通じきわめて現実性を帯びた問題となっていることでもわかるであろう⁽⁴⁾。

2 節 資本主義と外国貿易

資本主義の成立と貿易 原始経済社会における集団と集団との間の交換も、古代都市国家の大規模な商業活動も無条件に外国貿易であった。

これと区別さるべき国内商業はほとんど無視しえたのである。

歴史的に見るとヨーロッパの中世は農村中心の社会であって、商業活動は停滞していた。しかし、十字軍の遠征を転機に広汎な技術的経済的変革の時代が訪れ、やがて、15世紀末からの大航海時代を迎え、ヨーロッパ人によるアメリカ大陸の発見と喜望峯航路による東印度貿易の開拓は、いわゆる商業革命を引き起こしたので、封建的生産関係の諸矛盾を明るみに出す結果となり、資本主義的生産様式の先駆たるマニュファクチュアーの発生をうながした。ここで従来からの商人資本は市場のたえざる拡大を生活条件とする産業的生産の奉仕者となるとともに、他方では、交換価値めあての生産を発展させ、その範囲を拡大し、それを多様化し、普遍化し、貨幣を世界貨幣に発展させることによって、旧生産様式の分解に作用した。

もちろん、市場の拡大、商業活動の展開を通じて新興階級としての地位を確保したものが一方、自己の収入の源泉をうばわれて都市に流れ出したおびただしい労働者群の存在こそは、マニュファクチュアー成立の歴史的条件であったが、商業資本の活動の結果として拡張され形成された世界市場とその背景をなす植民制度こそは、資本主義的生産様式を生み出す直接的動因であった。

このように、ヨーロッパ社会においては、世界市場の拡大と植民制度の進展は、16世紀における一般の実存条件をなしていたのであって、社会的分業に豊富な材料を提供することによって、資本の近代的生活史を開始したのである。

資本主義的世界市場の形成と貿易の役割 ところで、資本主義的生産様式の基礎ができあがり、世界市場の拡大とともに生産物需要がますます増大するようになると、従来の規模の生産諸力をもってしては、もはやこれをみたくえなくなる。そこで、急激に増大をみた需要をまかなうために、この新しい事

態に即応して企業の分業化が促進され、社会的分業が進展し、そのために工場への動力および機械の導入をよびおこし、いわゆる産業革命の端緒をなすにいたり、資本主義の飛躍的發展の時代に道をひらいたのである。

中世社会が都市と農村との対立の中に存在したのに対し、資本主義国家は、本国と植民地支配を基盤として出発した。国民国家として成立した資本主義にとってその出発点から外国貿易は利益の源泉と見られ世界市場は利害対立の場ではなかった。しかし、資本主義の発展は資本のもつ内的必然性によって世界市場をたえず拡張しようとするようになるが、それは国内的利害と国際的利害の対立の上に成り立つことを教えた。いまや商業が産業を変革した時代から産業が商業をたえず変革し発展させる時代に変ったのである。産業革命の展開過程は、全産業分野の資本主義化の過程であり、産業資本の商業資本に対する勝利の歴史であった。このもっとも典型的な例が、18世紀から19世紀にかけて世界市場に雄飛したイギリス資本主義である。

イギリスに発生した産業革命はたちまちにして他の諸国に伝播し、ここに資本主義的世界の連関ができ上る。資本主義国家は、「市民社会」あるいは「ブルジョア社会」の「国家の形態での総括」であるとされているが、それは階級支配の機構であると同時に「市民社会」という共同体としての共通利害の組織でもあるという二重の性格を含意しているのであって、前者は合理主義的競争社会の論理を追求し、後者は諸国間における政治的調整の論理の背景となっている⁵⁾。しかし、両者は必ずしもつねに調和を保ってあらわれるとは限らない。なぜなら、前者は経済的合理主義を基調としているが、後者は、民族、あるいは国民といったナショナルなものが心理的背景となって発現するからである。

資本主義が形成され資本主義的世界市場が出現すると、世界市場は諸国の外国貿易による接触の場となる。資本主義はたえず自己増殖をとげていかなばならない必要から生産の無制限な拡大と無政府的競争を余儀なくされているのであるが、社会的生産の個々の部門間の発展の不均衡のゆえに発展した産業部門は外国市場を求めることとなるのであり、その結果世界市場は不均等な発展を

促進し、さらに外国貿易の原因をつくることとなる。外国貿易は資本主義の成立とともに不可避的なものとなり、一定の世界市場的連関ができ上る。そのもっとも特徴的なものは、国際金本位制であった。それは、資本主義の自己調整機能と経済的自由主義の信仰に依拠していた。しかし、それは先進国の立場と強大な資本の力を前提とする論理であると見ることもできる。いうまでもなく、その背後には、国際政治の場面におけるバランス・オブ・パワーの思想とシステムが厳然と存在したことを忘れるわけにはいかない。カール・ポラニーによれば、このシステムの源泉と母体は自己調整的市場なのだが、自己調整的市場などというものはまったくのユートピアでしかない、という。しかし、そうした特定の制度的メカニズムに中心をおいていたということは否定できないし、それが崩壊したというところに20世紀の危機の源泉があるとする⁽⁶⁾。ポラニーの指摘にもかかわらず、問題は国際的なバランス・オブ・パワーの基礎をなしていたイギリスの経済的基盤の沈下に最大の原因があったのではないか、と思われる。ともかく、この段階で外国貿易は資本主義と密接不可分のものとなったのであり、資本主義の運動法則を無視して語ることはできない存在となった。

資本の国際性と国民性 すでにのべたように商業活動の活発化と世界市場の成立は、資本主義の生産様式誕生の原因であり、またその結果でもあることは歴史の証明するところであるが、具体的にはイギリス資本主義の形成とイギリスの世界市場の確立過程の中にこれを見ることができる。商業資本は重商主義時代を通じ特別剰余価値の獲得のために世界市場を利用しており、相手国の利害を考える余裕はなかったが、産業資本が中心となるに従っていくような傾向は大きく変化していったのである。産業資本は世界市場を有機的に組織し、これを最大限に利用しようとして、貿易の国際的相互依存性を打ち出している。諸国の貿易活動は、国際的に平等な基盤において展開されることが必要であり、その限りにおいてその活動は自由なのであった。

イギリス資本は強力になればなるほど、世界市場において自由に活動することによりその国際性を遺憾なく発揮することができ、それは世界の進運に大い

に貢献していると考えられた。しかし、イギリスの資本はどこに行ってもイギリスの資本であり、イギリスの利害と無関係ではなかった。資本は本来資本である限り、国籍は無用であり、コスモポリタンな性格をもっている。しかし、世界市場において国内市場が二重の構造として存在しているかぎり——国境が存在し、国民国家が存在するかぎり——資本もまた国民性を完全に脱することはできない。このことは19世紀になって、資本の輸出が一般化し、貿易関係がいっそう複雑化するようになるとはっきり看取され、重要な意味をもつこととなる。すなわち、それは、帝国主義段階の一つのもっとも重要な指標として指摘されるにいたるのである。さらに第二次大戦後、資本と生産の国際化が問題とされ、多国籍企業の出現が見られるにいたって、資本の活動とナショナリズムあるいはナショナル・インタレストとの関係が問われるにいたっている。

貿易現象の二重性 しかし、他面、貿易現象そのものに由来する特殊な関係からこのことは問題となる。個別企業からみれば貿易現象は国境を越えて行われる商品交換であり、対外決済を必要とする取引なのである。取引形態に関するかぎり、国内取引と何ら変わらないようにみえる。しかし、貿易取引は、国内取引と違って、同時に国家間の経済関係となってあらわれる。すなわち、両国間にまたがる貿易関係は、個別企業の問題であるとともに、両国の国民経済相互のかかわり合いの問題でもあるという二重の現象を呈するのである。

このことは重商主義時代においても気づかれており、貿易の結果、金の配分が変り、やがて国際価格に影響するという相関関係が論じられていた。現代においては、国際収支、あるいは国際貸借に関連する問題となるわけだが、それは当然、商品取引という関係だけでなく資本やサービス関係についても相互の関連を持つことになる。ということは、貿易現象は個別企業の立場を越えて、国民経済相互の現象として重要な意味をもってくるのであって、そこに国家の政策が登場する理由がでてくるわけである。この点、貿易現象もまた二重的性格をもってあらわれる。

個別企業の活動はこれを無条件に放任すれば、国境は制約要因となり、国家